

保健衛生研修委員会研修会

日時：平成30年7月6日(金) 14:40～16:40

場所：良陵会館 大会議室

1. 教育講演

「医師以外のメディカルスタッフも知っておくべきピロリ菌
感染胃炎の知識 ～感染診断や除菌治療もふくめて～」

引地 拓人（福島県立医科大学附属病院内視鏡診療部）

司会：吾妻 明子（福島県保健衛生協会）

2. 情報交換会

「医師以外のメディカルスタッフも知っておくべきピロリ菌感染胃炎の知識
～感染診断や除菌治療もふくめて～」

引地拓人（福島県立医科大学附属病院内視鏡診療部）

【緒言】日本では年間で約12万人が胃がんにかかり、約5万人が胃がんで亡くなっている。胃がんの原因のほとんどがピロリ菌であるため、胃がん撲滅のためにはピロリ菌対策が重要である。

【感染経路】感染時期は乳幼児期であり、大人になってから感染することは稀である。感染したピロリ菌は、退治をしない限り永久に胃に住み着き、ピロリ菌感染胃炎が生じる。ピロリ菌の感染経路は明らかでない点が多いが、口から胃に入り込んでくることは容易に想像できる。感染者との単なる接触や食べ物からすぐに感染するわけではないが、上下水道の整備とともにピロリ菌の感染率が低下していることから、汚染された水が関与していることは明らかである。1950年以前生まれの人のピロリ菌感染率は40%以上であるのに対し、1970年代生まれで20%、1980年代生まれで12%である。また、ピロリ菌の感染は、乳幼児期に一番身近にいる人（両親が多い）との関係が深いとされている。

【感染診断】ピロリ菌に感染しているかを調べるためには、50歳代の前に検診などで内視鏡検査を受けることが重要である。内視鏡検査での胃の見え方だけでピロリ菌感染を推測できる。内視鏡検査で判断しにくい場合には、血液検査や呼気検査などでピロリ菌感染を調べることができる。

【除菌治療】胃酸分泌を抑制する薬と抗菌薬を1週間飲むだけの治療でピロリ菌を退治でき、いったんピロリ菌を退治できれば再度感染する可能性は極めて低い。また、若い年齢のうちにピロリ菌を退治することで、胃がんを予防できる可能性がある（ただし、絶対に胃がんにならないわけではない）。また、感染時期は乳幼児期であることから、次の世代にピロリ菌を残さないためにも、結婚する前にピロリ菌を調べて、感染があれば退治することが望ましい。

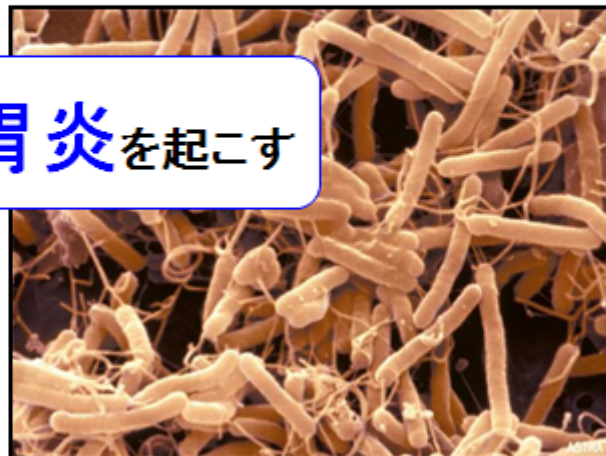
【結語】胃がんの撲滅には、ピロリ菌を知り、ピロリ菌を退治することが重要である。

司会：吾妻 明子（福島県保健衛生協会）

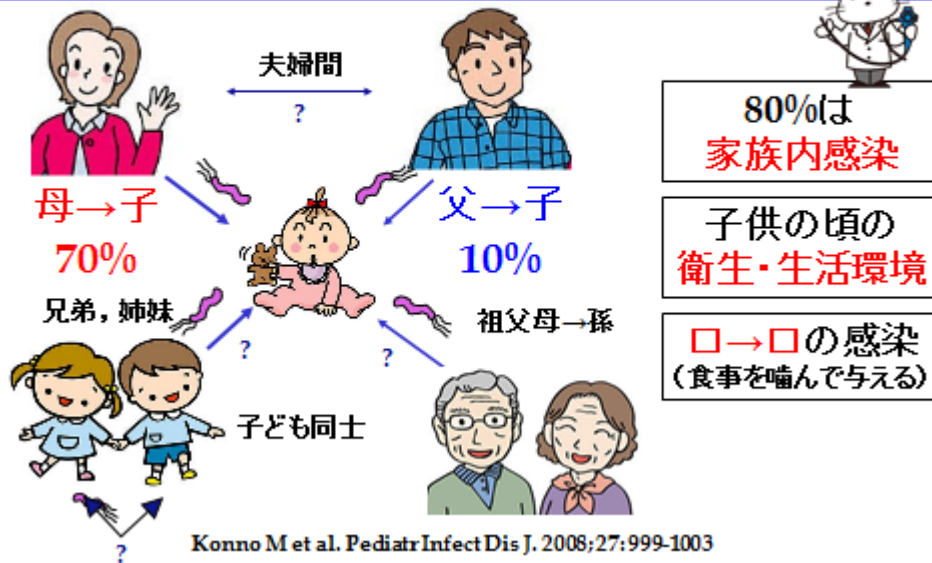
ピロリ菌

- ・胃内に棲息するらせん状のグラム陰性桿菌
- ・強力なウレアーゼ活性により高濃度アンモニアを産生する

慢性胃炎を起こす



ピロリ菌の感染経路は？



ピロリ菌が起こす病気

ピロリ菌感染(5歳以下)

数週間から数ヵ月で100%

慢性胃炎(ピロリ菌感染胃炎)

萎縮性胃炎

胃癌

胃・十二指腸潰瘍

胃過形成性ポリープ

胃MALTリンパ腫

特発性血小板減少性紫斑病

